

国際総合科学部のグローバル・イングリッシュ戦略： セブ・シティから世界をつかめ！

福屋利信

はじめに

グローバル人材養成を目指して平成27年4月に開設された山口大学国際総合科学部は、1学科定員100名でスタートしたが、それより2年前、筆者はその新学部設置準備委員に任命されていた。そこで与えられた主なミッションは、100名全員を1年間（2年後期から3年前期）の交換留学に送り出すための受け入れ校を世界中に確保すること、加えて、英語能力を向上させることに主眼を置いた語学留学ではなく、教養科目と専門科目とで20単位を取得する正規留学に向けての教育支援体制を構築することであった。

それらを実現するには、留学先がどこであれ、まずは「国際共通語としての英語」(English as an International Language)の力がある程度つけさせてから（派遣先への質保証としてTOEIC 600点以上取得を内部基準化）、提携校へ送り出さなければならない。もし英語力が不足していたなら、留学先で単位が取れず、帰国してから単位を取り直すことになる。そうすると、必然的に留学イコール留年となってしまう。逆に言えば、1年間の交換留学中に国際総合科学部として読み替え可能な20単位を取得し、全員が4年で卒業すれば、それは学部及び学生双方にとって大変有益なこととなる。

しかし、そのシステム構築は、「言うは易く行うは難たし」である。それでも、学部の卒業要件にTOEIC 730点を設定し、卒業生の実践的英語力の最低基準を社会に対して保証しようとしたのが他ならぬ筆者自身であったゆえ、当然ながら責任があった。

そのような状況下、平成26年度は、交換留学の提携校を探し求めて世界中を駆け巡り、何とか100人分を越える交流協定(Memorandum of Understanding: MoU)を結ぶことができた。さりながら、留学先の最終選考が予定されている1年終了時まで、TOEIC 600点を確実に取得させる方法論の確立については、暗中模索の状態がしばらく続いた。そんな中で、一条の光を見出したのが、フィリピン英語研修という選択肢であった。

1. 国際総合科学部が目指すグローバル人材養成

国際総合科学部は、外交官や商社マンといった「エリートグローバル人材」の養成を目指しているのではない（もちろん、結果的にそういう人材が育つてもよい）。一言で言えば、地域のグローバル化を担う「泥臭いグローバル（造語）人材」の養成を目指しているのだ。

少子化による人口減のせいで、国内市場の縮小が避けられない現状の中で、多くの日本企業は、経営規模の大小を問わず、海外市場に生き残りを賭けた事業展開を余儀なくされつつある。全国津々浦々の多くの企業は、選択科目としてではなく必須科目としてグローバル化を課せられているとも言えよう。山口県内の企業とて例外ではない。そして、その地域社会のニーズに応え得る人材を育てようとして生まれたのが国際総合科学部である。その意味において、国際総合科学部は、徹底したアウトカム・ベースの学部なのだ。

巷に散見される「グローバル化不要論」や「英語愚民化論」は、21世紀の日本社会が直面している現実から目を逸らした観念論または情緒論でしかない。ときには、「グローバル化が進めば、日本人としてのアイデンティティが薄まるのでは？」という質問をしてくる者さえいたりする。日本にとってのグローバル化は、日本を世界に発信する営為であって、グローバル人材に真っ先に求められるのは、日本人としてのアイデンティティの確立だ。日本のグローバル化には、日本人の「心」が前景化されていなくては始まりさえしない。さらに言わせて貰えば、英語能力だけで国際力を判断する（それなら愚民化につながる）のではなく、「国際共通語としての英語」を駆使し、グローバル社会においてどれだけ日本に貢献し得たかで、グローバル人材の国際力は測られるべきである。

世界の街角で、ときには異文化摩擦に発熱し密かに悔し涙を流すことがあっても、何が課題かを突き詰め粘り強くそれを解決していく能力、また、簡単には自分の任された仕事を諦めたりはしないタフな精神力、この二つを併せ持った「泥臭いグローバル人材」を育てたい。その際、コミュニケーションに必要な英語能力に加えて、ビジネス・パフォーマンスに客観性を齎してくれるデータ処理能力をも携えさせる。そんな文理融合型の総合力を兼ね備えた人材が、我々の学部に限らず日本の大学から沢山育ち、彼らがグローバル市場の最前線で活躍する姿が常態化したとき、日本経済は輝きを取戻すに違いない。

2. グローバル人材に求められる英語力とは

英語が世界の共通語として使われているのは、英語が世界で最も優れた言語であるからではなく、かつての栄光に翳りは見えないものの、まだまだ英語母国語圏の政治・経済が世界を先導しているからだ。

それでは、そのグローバル市場で勝負するグローバル人材の英語力には、どの程度の言語運用能力が求められるのだろうか。端的に答えてしまえば、英語の母国語話者並みの流暢な英語が必要なわけではなく、グローバル・ビジネスの現場で意思をはっきり伝え、ビジネスを展開していくに必要な「道具」としての実践的英語力さえあればよい。それこそが、グローバル人材に必要な英語であり、最近では「グローバル・イングリッシュ」とも呼ばれる。そしてその強力な推進力として、「第二言語としての英語」(English as a Second Language : ESL) が範疇化され注目を集めている。日本中の教育委員会が地域の小・中・高等学校に派遣している「外国語指導助手」(Assistant Language Teacher: ALT) の最近の採用傾向からも、マルタ、フィリピン、フィジー、マレーシア、シンガポール、インド、スリランカ、ジャマイカなどの第二言語としての英語話者を増やしていこうとする意図を読み取ることができる。近年話題に上ったグロービッシュ (Globish : 英語を母国語としない者が国際ビジネスに適応するための国際共通語) も、こうした今日の英語世界を取り巻く潮流の延長線上に捉えられよう。グローバル化の波は、言語世界にも確実に押し寄せつつあるのだ。

こうしたESLを巻き込みながらグローバル・イングリッシュを普及していこうとする試みは、「外国語としての英語」(English as a Foreign Language : EFL) 話者がグローバル市場に参画していくに際して、少なからず言語学習上の心理的壁を低くしてくれる。日常生活での使用機会が少ないゆえ、英語に対する心的バリアの高い日本人には、ことさら有り難い傾向である。高城剛は、「ESLは、(EFL話者である)多くの日本人にとって、グローバル社会を生き抜くためのライセンスになる」¹と断言している。

3. グローバル・イングリッシュに対する日本の大学英語教育の対応力

日本の大学英語教育は、新しい時代が要求する英語教育、すなわち学生が卒業後直面するグローバル社会に適応できる実践的英語教育を効果的に施しているだろうか。残念ながら、答えは「否」と言わざるを得ない。

日本の大学1年生のTOEIC平均スコアは430点 (TOEIC委員会2013年調査)とお寒い状況で、さらに恥ずかしいことに、大学受験から時を経ていない1

年生のときが最も平均スコアが高く、2年生、3年生、4年生と徐々に下がっていくという統計結果すらある。こうした大学英語教育における機能不全は、日本の英語教育界が抱える普遍的問題である。ちなみに、TOEIC 400点台のスコアシートは、英語の実践力が身につけていないという証明書でしかない。

海外の大学を訪問していて、国際担当者から必ず訊ねられることがある。「高い教育水準を誇る日本からの留学生が、同じ東アジアの韓国、台湾、中国からの留学生に比べて、英語だけなぜあんなにレベルが低いのですか？」という質問である。正直、返す言葉がない。日本の大学における実践的英語教育のレベルは、韓国には遠く及ばず、台湾には随分前に追い抜かれ、中国にも最近追い抜かれた。2010年のTOEFLスコアの国別ランキングにおいて、日本はアジア30か国中27位と低迷し、その後も今日まで効果的な改善はなされていない。TOEICやTOEFLが最良の英語能力判定試験とは言えないだろうが、国際的判断基準の試験であることに疑いの余地はなく、このランキングを軽視することはできない。まずは現実を直視することからしか、日本の大学英語教育に再生の道はないだろう。

4. フィリピン英語研修の費用対効果

それでは、TOEIC 400点台で入学してくるはずの日本の平均的大学1年生たち（TOEIC委員会2013年度調査での高校生約3万人の平均スコア404点を根拠にした推測）を、どうしたら卒業時にグローバル基準の平均800点台に導いていけるのだろうか。

日本の大学英語教育の膠着状態をブレイクスルーするには、情けないが、あっさり英語教育をいくつかの語学学校などに外注し、競争原理を働かせながら成果を求めるのも一つの方法だと思う（現在は英米文学及び英語学の教員が主力を担う。筆者もその一人）。文部科学省の高官からあからさまにそれをサジェストされたこともあった。あるいは、外国語センターを立ち上げて、英語教育の専門家に学生の英語能力向上を委ねる手もある。大学としては、後者の方が正当な手段であろう。されど、その遂行には大変な意識改革と構造改革、加えて、何より多額の運営資金が要る。予算削減を強いられている地方の国立大学では、悲しいかな非現実的な戦略と言わざるを得ない。

そこで筆者が試行錯誤の末辿り着いたのが、短期集中型（1か月）のフィリピン英語研修というオルタナティブな選択肢だった。その信頼度の高さは、山口大学経済学部を中心に、自ら希望してフィリピン研修を体験した学生の実績と研修後のアンケート調査からも明らかであった。そして、このフィリ

ピン研修の優位性の一番手に挙げられるのが、その費用対効果の高さである。

英語母国語圏の大学に1か月間英語研修にいくと、費用は60万円から70万円はかかる。これに余暇と週末を過ごすお小遣いを入れると、すぐに80万円以上に達する。それでいて、1日の平均授業時間は約4時間程度でしかない。筆者は、そういった英語母国語圏での短期英語研修を事前指導及び単位認定する立場にあったので分かるのだが、そこでの研修で向上する学生の英語力は、TOEICスコアに換算すると、よくて50点、中には海外で遊んできただけという学生も少なからずいた。平均すると鼻真目に見ても30点アップというあたりだろう。

それでも、そうした英語研修に参加した日本人学生たちの大半は、帰国後、「楽しかった」、「英語の勉強にやる気が出た」などと無邪気な主観的満足感を口にする。彼らは、欧米及びオセアニアなど英語圏諸国への憧れも相俟って、そこでの異文化体験の満足度を英語研修そのものの満足度にすり替え、「楽しかった」と答えているに過ぎない。

一方、英語圏の研修先もそれぞれの国のブランド力に胡坐をかき、「オイシイ」教育ビジネスを謳歌し、真摯な努力を怠ってきたと言ってよい。それを完全否定できる関係者は極めて少ないだろう（事情に詳しくれば詳しいほど、その否定は難しくなる）。英語圏の研修機関は、研修者の「樂をすることを樂しむことに読み替えた満足度」への緻密な内省を怠り、「我々の研修プログラムは満足度が高い」と自画自賛してきた。クラス分けのためのプレイスメントテストは行うが、プログラム修了時に英語力がどれだけ伸びたかを客観的にチェックしている英語圏研修は極めて少ない。英語圏の分析は、研修者の主観に依拠している部分が多いと言って差し支えない。

振り返ってみると、筆者はこれまで、それでもよしとしてきた。希望者のみが参加しているのであり、余計な口を挟む必要はないと考えていたからであった。しかし、国際総合科学部の場合は、1年次の夏休み（8月末から9月末）になかば強制的に全員を海外研修にいかせるのだから、費用は極力抑えられなければならないし、何より参加学生のTOEIC、TOEFL、IELTSのスコアアップという客観的成果が要求される。英語学習のモチベーションを上げるためにフィリピンへ出かけていくというレベルの話ではない。

フィリピン英語研修だと人件費の安さをアドヴァンティージにして、1か月の研修にかかる費用は、渡航費、寮費、食費、授業料、保険料などを含めて30万円前後だ。なおかつその価格には、マンツーマンのスピーキングの授業が沢山組み込まれている。1日の平均授業時間は8時間以上と長い。さらに

その後、夜の3時間が自習用に充てられており、「義務自習」と名づけられている。おかしな言葉だが、とにかく、軍隊並みの「イングリッシュ・ブート・キャンプ」なのである。そこで向上する英語力は、TOEICスコアなら平均70点程度であろう(フィリピンの語学学校側は、100点アップを宣伝文句に謳っているところもあり、一生懸命頑張った学生は、そのくらいのスコアアップは十分望める)。「半分の費用で倍の効果」を見込める費用対効果の高さが、フィリピン短期語学研修のセールス・ポイントだ。

フィリピン英語研修は、海外英語研修はお金がかかるというイメージを覆し、多くの英語学習者に手が届く価格を提供してくれている。この点は、一定の強制力を持って団体で受講者を派遣しようとするとき、何ものにも代えがたい利点となる。そして、その英語力向上実績は、アジア諸国を中心に手強い信頼を得つつある。

フィリピンには、英語圏諸国のような国としてのブランド力はない。したがって、その評価を研修者の主観に甘えることはできない。客観的な結果が求められる「キビシイ」教育ビジネスなのだ。そのために、各語学学校が研修前と後での伸びを測る信頼性の高い試験を実施している(研修前はTOEIC, TOEFL, IELTSの模擬試験、研修後は公式テストを実施)。そこで数値化された英語力の向上こそが、フィリピン英語研修の頼るべき実績となっている。そんな手強い実績が評価され、いまや、日本におけるフィリピン留学のGoogle検索数は、オーストラリア、カナダを抜いて、アメリカ、イギリスに迫る勢いだ。

5. 国際総合科学部の英語教育スキーム

国際総合科学部では、このフィリピン語学研修で、全員TOEIC 600点以上に到達させたい。そしてその後、英語によるディベートやプレゼンテーション能力を養う講義などで留学前の準備を入念に行わせつつ700点台まで導きたい。そうしておいて1年間の交換留学に送り出せば、留学先の正規科目を英語で学ぶ過程で、TOEICスコアは自然と800点台に乗ってくるだろう。さらに、留学を終えて帰国した後の専門科目の半数以上を英語で行うことで、留学で身につけた英語力をアカデミックな面からも磨きをかけ、世界で活躍できるしっかりしたグローバル・イングリッシュを携えさせてグローバル社会に送り出したい。

以上が、筆者の描いたTOEIC 400点台から800点台への実践的英語教育スキームである。その基礎づくりにフィリピンでの約1か月間の英語研修を公式な

かたちで据えたのは、日本の大学では初めての試みだと思う。

6. フィリピン英語研修の週末アクティビティ

フィリピン英語研修期間中の毎週末には、日本の若者たちがフィリピンの貧困層の子供たちを支援しているボランティア団体を訪問し、学生たちに、フィリピンが抱える最大の社会問題である貧困を体感して貰うアクティビティを企画した。そこには、フィリピンの影の部分に一条の光を射し込もうと誠実な努力を続ける日本の若者たちと、その援助にすがりつつも全身でその善意に応えようとするフィリピンの子供たちがいる。彼らが強い陽射しの下で流す汗は、どんな宝石にも負けないくらい光り輝いて見えて、その前では、少したじろいだことを筆者は覚えている。この体験を学生たちにもさせたいと思った。

東南アジアの貧困から視線を逸らさない心的スタンスは、ASEAN諸国とのさらなる関係強化を模索しつつ自国のグローバル化を推進する日本にとって、特にその日本のグローバル化を担う若い人材にとって、不可欠な視点である。課題をしっかりと分析できる感受性を養うために、あるいはその課題に取り組む際の行動力の大切さを感じ取って貰うために、この週末ボランティア・アクティビティは、フィリピン英語研修に計り知れない付加価値を与えてくれるはずだ。

軍隊並みのスパルタ式言語教育とフィリピンのリアリティに触れる社会教育（真の異文化体験でもある）、これらを通して、タフな精神性を有する「泥臭いグローバル人材」の芽が吹き出してくる。世界という無限大のキャンパスにフリーハンドで夢を描くためには、逆説的に、一度徹底的に基礎力を養うための詰め込み作業が必要だ。抑える力が強ければ強いほど、跳ね上がる力が強くなるスプリング・ボードと同じ原理である。

7. フィリピン英語研修の優位性を支えるマンツーマン・レッスン

世界中の幼子は、母親からのマンツーマン・レッスンによって母国語を覚える。母親は、文法で言語を教えるのではなく、母の愛で辛抱強く同じ間違いを何度も正しつつ、我が子に言語を授ける。その母の愛は普遍ゆえ、先進国の子供も発展途上国の子供も同様に、あるいは言語の違いに拘わらず、同時期に母国語の原型を定着させる。世界的言語学者のNoam Chomskyは、これが可能な根拠として、全ての人間が生まれながらに普遍的な言語学習機能を備えていることを指摘し、それを「普遍文法」(Universal Grammar)

と呼んだ。

グループ・レッスンでは、英語に自信のある数人の参加者が会話を独占して、残りの参加者は講師と積極的発話者の会話を聞いているだけという状況に陥りがちだ。しかし、マンツーマン・レッスンでは、自分に合ったペースと内容で英会話を習得していける。また、他の研修者の目を気にする必要もない。フィリピン英語研修の半分以上を占めるマンツーマン・レッスンのブースには、母親の愛の代わりに、「フィリピーノ・ホスピタリティ」と呼ばれる底抜けの明るい笑顔と寛容さがある。前者がスペイン支配の齎したフィリピン人に特有の資質（「アジアのラテン系」とも称される明るさ）であるのに対して、後者には、アメリカ支配が齎した教育体制が図らずも大きく寄与している。



フィリピン人講師たちは、母親からはタガログ語（第一言語）を伝授され、学校では公用語である英語（第二言語）で教育を受ける。すなわち、フィリピン人たちは、先天的「普遍文法」ではなく、学校での後天的「教育文法」で英語を習得してきているのだ。その帰結として、英語の「普遍文法」を持たないノン・ネイティブの限界を知り、

それを克服していくための「教育文法としての英文法」の大切さも経験値として蓄積している。言い換えれば、外国語として「教育文法」によって英語を学ぶ日本人研修者と類似した学習環境を共有してきているのである。だから「フィリピン人講師たちは、日本人研修者の視点に寄り添い、日本人の英語に忍耐強くつきあう寛容さを、英語圏の講師たちよりも多めに持ち合わせていることが多い。」² 日本人EFL学習者にとってフィリピン人ESL講師たちは、とても頼りになる強い味方なのである。

2011年のフィリピン政府観光局による「フィリピン英語留学意識調査」では、フィリピン英語留学を選択した理由を事前に問った際、「費用が安い」が84.1%で第1位であった。一方、事後における研修への満足度調査の結果は、「マンツーマン・レッスンがよかった」が78.0%で第1位であった。ちなみに、「費用が安かった」は、事後では6.0%でしかなかった。この調査からも分かるように、フィリピン英語研修は安さが魅力に違いないが、高い満足度にはマンツーマン・レッスンが一番の貢献を果たしていると言える。

8. フィリピン英語研修のパイオニアは韓国

フィリピン英語研修に最初に目をつけたのは韓国であった。国内市場規模が4千万人と小さい韓国では、主要市場を国内に頼っている、さらなる発展は望めない。海外を主要市場と捉えて経済活動を行わなければ、自国の持続可能な発展は不可能なのである。そこで、国を挙げてのグローバル戦略として英語教育強化に取り組み、その結果、「国際共通語としての英語」が国民全員に要求されるスペックとなった。かくして、韓国にとっての英語は、小規模国内市場というディスアドヴァンティージを高い国際競争力というアドヴァンティージに変換する「道具」となるに至ったのである。その韓国が目をつけたのが、アメリカ、イギリスに次ぐ世界第3位の英語人口を誇り、かつ人件費が安いフィリピンであった。

韓国の英会話学校のネイティヴ講師の平均的月額報酬は300万ウォン程度であり、日本円で約30万円といったところが相場（日本でも大体同じ相場）だろう。これに対して、フィリピンでフィリピン人英語講師を雇った場合、平均的月額報酬は1万ペソ程度でつまり約3万円である。つまり、十分の一の人件費で済むのだ。これに豊富な英語人口が加わり、フィリピンでは、マンツーマン・レッスンに必要な講師を多数確保できるわけだ。

しかし、フィリピン人講師の英語力を不安視するむきもある。そういう人には、世界156か国、10万8千人を対象に行われたグローバル・イングリッシュ社（アメリカ）の2013年調査を紹介しておこう。ここでは、フィリピンのビジネス英語力が、英語圏の国々を押しつけて、世界第1位にランキングされている。グローバル・ビジネスにおけるフィリピン英語教育の評価は意外と高いのである。それが証拠に、スカイプを使ったオンライン・マンツーマン・レッスンにおけるフィリピン人講師は、アジア及び東ヨーロッパ諸国で大人気を博している。

こうしたフィリピン英語教育の確かな実力が高いコストパフォーマンスを生み、そこに韓国人投資家たちがビジネスチャンスを見出した。そして、フィリピンに語学学校を次々と開設し、自国の兵役さながらのスパルタ教育システムを構築していった。そのフィリピンに、英語力をできるだけ短期間に上げたい韓国人英語学習者たちが大挙して押しかけた。最初は首都のマニラを中心に学校が増え、セブ・シティ、ダバオ、バギオ、バコロドといった地方都市にも広がった。20世紀の終わりから21世紀の初頭にかけてのことであった。さらに、語学学校と英語学習者との間を取り持つ留学エージェントもビジネスとして成立するようになり、韓国は、確固たる英語研修システムを南

沙の島国に形成し得たのであった。

9. なぜ、セブがベストか

韓国主導だったフィリピン英語研修だが、その英語教育上の利点に気づいた日本人英語学習者が2004年頃から少しずつフィリピンを訪れるようになったと言う。そして、そうした日本人の大半は、セブを好んだので、日本人のフィリピン英語研修の中心はセブになった。今では、日本からの英語研修の9割がセブを選んでいるとう統計もある程だ。その理由は、ひとえに日本人のフィリピンに対するイメージから、セブが少し離れたところに意識づけられているゆえであろう。

フィリピンと聞くと、事件に巻き込まれる可能性があるとか、はたまた、日本での不法就労者の輩出地とかの先入観がある。その先入観がフィリピン英語研修に対する最大の不安要素と言っても過言ではないだろう。それは、フィリピンのごく一部の側面に過ぎないが、日本人の脳裏にはその先入観が拭い難いほどに刷り込まれている。しかし、セブと聞けば、日本人は美しいビーチ、アジア有数のギター製造地といった南国の楽園をイメージする。セブが7,000に及ぶフィリピンの島のひとつと認識しない日本人さえいる。

現実には、そんなイメージは、セブ本島と二本の橋で結ばれているマクタンの、それもごく限られたリゾートホテルの林立する地域が提供しているに過ぎない。語学学校のほとんどは、マクタン地区ではなくセブ本島のセブ・シティにある。そのセブ・シティは、高層ビル群やマンモス・ショッピングモールが聳え立つ近代商業都市だ。またIT産業を中心に街には経済特区も作られ、アジアのコールセンターとして注目を集めている。フィリピンで一、二を争う経済活況を呈している街なのである。シーフロントには、アジアで最大規模、世界で6番目に大きいショッピングモールがオープンしたばかりだ。

そんなセブ・シティの優位性は、マニラに比べて良好な治安、ダバオ、バギオ、パコロドにはない適度な都会感覚、週末を楽しく過ごせるリゾートエリア、語学学校が沢山あるゆえの選択肢の広さなどが挙げられる。英語研修に関してセブがベストと言えるのは、安心できる学習環境と快適な生活環境とのバランスの良さによるところが大きい。

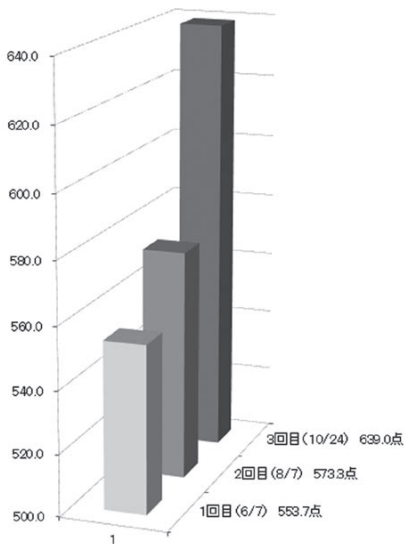
2013年頃から日本資本の語学学校が急速に増え始めたセブ・シティは、現在、日本人経営の語学学校の開校ラッシュで、さらに熱を帯びつつある。日本資本の語学学校の特徴は、日本人スタッフが複数常駐していること、日本食を提供していること、韓国式スパルタ教育を幾分緩め日本人向けにカスタ

マイズされた教育体制を打ち出していること、危機管理と衛生管理が日本人の意識で組織化されていることなどであろう。このような理由で、山口大学国際総合科学部も日本資本の語学学校を選択した。セブは、グローバル人材に必要なグローバル・イングリッシュを確実に授けてくれる「世界に一番近い島」なのだ。

10. 国際総合科学部のフィリピン研修結果

フィリピン英語研修の優位性と注意点を、あらゆる角度からチェックした上でなされた国際総合科学部のフィリピン短期英語研修（平成27年度）の成果を報告しておこう。第1クォーターの授業「TOEIC準備」終了後の6月7日に山口大学1年生全員が受験したTOEIC・IPテストでは、国際総合科学部の平均は553.7であった。これは医学部に次ぐ平均点である。その2か月後の8月7日には、TOEIC 600点を取得できていない学生を中心に受験し、学部全体の平均点を573.3にまで押し上げた。この時点で、留学への内部基準であるTOEIC 600点には54人が到達した。そして、100人の研修者がそれぞれのTOEIC基礎点（各自の最高点）を持って、8月29日から9月27日までのセブ英語研修にでかけたのであった。100人中66名がTOEICコースを、

TOEICコース受講者のスコアの伸び



34名がIELTS/TOEFLコースを受けた。ちなみに、引率者は1コースに英語のできる教員1名がつき、加えて、FDとSDを兼ね、学生と同じ内容の研修を受けながら引率も兼務する教員あるいは職員が1名ついた。すなわち、常時4名の教員・職員が、学生の研修をサポートしたのであった。

TOEICコース66人は、フィリピン研修から帰国後の10月24日、ほぼ全員がTOEIC・IPを受験した。ここでは、100点以上スコアアップした者が続出した反面、スコアが伸び悩んだ者も少数ながらいた。総体的には、全体的な平均を70点近く上げて、639点とした。山口大学全学部のトップにたったわけである。入試での英

IELTSコース受講者のスコアの伸び

氏名 ナンバー	Listening		Reading		Speaking		Writing		TOTAL		difference
	8月	9月	8月	9月	8月	9月	8月	9月	8月	9月	
1	5.5	5.0	6.0	7.0	4.0	5.5	5.5	6.0	5.5	6.0	0.5
2	-	4.5	-	6.5	-	5.0	-	6.0	-	5.5	
3	-	5.5	-	6.5	-	5.0	-	5.5	-	5.5	
4	5.0	5.0	6.0	6.0	4.5	5.0	5.5	6.0	5.5	5.5	0.0
5	5.0	4.5	4.5	4.5	3.0	4.5	3.5	5.5	4.0	5.0	1.0
6	6.0	6.0	6.0	6.0	5.0	5.5	5.5	6.0	5.5	6.0	0.5
7	5.5	6.0	5.0	6.0	5.5	5.5	4.5	6.5	5.0	6.0	1.0
8	-	5.5	-	7.0	-	6.0	-	5.5	-	6.0	
9	5.0	5.5	5.5	6.5	4.5	5.5	4.0	5.0	5.0	5.5	0.5
10	-	5.0	-	6.0	-	5.5	-	5.5	-	5.5	
11	-	5.0	-	5.5	-	5.5	-	4.5	-	5.0	
12	4.5	-	5.0	-	4.5	-	5.0	-	5.0	-	
13	5.5	-	6.0	-	5.0	-	6.0	-	5.5	-	
14	5.0	5.5	5.5	5.5	4.0	5.5	4.5	5.5	5.0	5.5	0.5
15	4.5	-	4.0	-	5.0	-	4.0	-	4.5	-	
16	-	5.5	-	6.0	-	5.0	-	6.0	-	5.5	
17	-	5.0	-	6.0	-	4.5	-	6.0	-	5.5	
18	-	5.5	-	6.0	-	5.5	-	6.0	-	6.0	
19	-	5.0	-	7.0	-	6.0	-	5.5	-	6.0	
20	5.0	-	4.5	-	4.5	-	5.0	-	5.0	-	
21	-	5.0	-	5.5	-	5.5	-	6.0	-	5.5	
22	-	7.5	-	7.5	-	6.5	-	6.5	-	7.0	
23	5.0	-	3.5	-	5.5	-	4.5	-	4.5	-	
24	-	5.0	-	6.0	-	5.5	-	5.0	-	5.5	
25	5.0	-	4.5	-	3.5	-	4.0	-	4.5	-	
26	5.5	5.5	5.0	5.5	6.5	6.0	3.5	5.5	5.0	5.5	0.5
27	-	5.0	-	5.0	-	5.5	-	5.5	-	5.5	
28	-	6.0	-	6.5	-	5.5	-	6.0	-	6.0	
29	5.0	5.5	5.0	6.0	4.0	5.0	4.0	5.5	4.5	5.5	1.0
30	5.5	5.5	5.0	6.5	5.5	6.0	6.0	5.5	5.5	6.0	0.5
31	-	5.5	-	5.5	-	5.5	-	6.0	-	5.5	
Average	5.2	5.4	5.1	6.1	4.7	5.4	4.7	5.7	5.0	5.7	0.6

語の成績は、医学部を除いて他の学部と大差なかったもので、入学後7か月でのスコアの伸びは驚異的と言える。しかし一方で問題も残った。留学内部基準の600点に達していない学生が30人いたことである（500点台が22人、400点台が8人）。留学先を決定する来年2月までには、補講を重ねて、何とか全員に600点以上を取らせ、1年間の交換留学に送り出したい（12月5日のTOEIC・IPで、600点に達しない学生は20名にまで減少、全体平均は660点に達した。）。

では次にIELTSコースの結果を見てみよう。前ページは研修前と後とのスコア比較である。

IELTSコースは、参加資格をTOEIC 600点以上取得している者に限定した。なぜなら、600点以下では、非常に高度なレベルのIELTS授業についていけないからだ。そのスクリーニング効果と視聴覚教材を効果的に使用した指導法、さらには学生の頑張りが加わって、フィリピン研修終盤の9月19日に現地で開催された公式テストでは、期待していた以上のスコアの伸びを示した。研修前の平均5.0が5.7（実際のIELTSスコアは0.5刻み）まで上昇したのである。25人中、7.0が1人、6.0が8人、5.5が14人、5.0が2人と、全ての学生が留学希望先の要求点（minimum requirement）をクリアした。彼らは、通常なら1年くらいかけてやっと叶えられるレベルアップを1か月で成し遂げたわけである。これほどの成果は、フィリピンでのスパルタ研修でしか得られなかっただろう。

TOEFLコース研修者は、フィリピン研修中に公式テストがなかったのも、帰国後それぞれが自分で公式テストを受けざるを得なかった。集計結果はまだ出ていない。

11. 今後の課題と次なる目標

順調に滑り出した国際総合科学部のフィリピン英語研修であるが、まだまだ解決していかなければならない諸課題が残っている。一番目は、フィリピンの衛生環境への対応策である。今回の研修では、お腹を壊した学生、発熱した学生が続出した。幸い、日本でかけた保険によって、入院は非常に快適な個室をカバーしていたし、医師のレベルも高く、24時間体制で医療サポートを提供してくれる「ジャパニーズ・ヘルプデスク」も完備されていた。医療体制は万全であったと言える。しかし、手洗い、うがい（この二つに勝る予防法はないそうだ）を徹底し、自分の健康は自分で管理するという当たり前かつ最善の予防習慣を植えつける点においては、十分な指導ができていた

とは言い難い。引率者も学生も、1か月という滞在期間の意味とそれが齎す体調変化を軽んじていた感は否めない。この点に対する事前指導強化の必要性を痛感している。

フィリピンの治安は、もちろん日本に比べるとお世辞にもよいとは言えない。人の集まるところではスリ・ひったくりが多いし、法外な料金を請求してくるタクシーに遭遇することもある。街で声をかけられて家までついでいくと、気がついたら賭博のカモにされているというトランプ詐欺も後を絶たない。ときには、警察官と犯罪者との境界線が曖昧なことすらある。金ですべて片がつく国なのだ。

しかし、上記の軽犯罪及び悪習慣は、東南アジアの大都市ならどこでも大なり小なり見受けられる光景であり、フィリピンに特有の事象という訳ではない。そして、これらは、危機管理意識さえしっかり教え込んでおけば、簡単に予防できるものばかりだ。だが治安のよさに慣れている日本人は、犯罪に対する危機意識が不足している。たまたま今回被害はなかったが、後で知った引率者が胆をつぶすような軽率な行動をとった学生もいた。

フィリピン英語研修に継続性を持たせるには、学生の体調管理能力と危険察知能力のさらなる強化が最重要課題である。グローバル化とその過程で直面するリスクは表裏一体のものであり、リスク・ヘッジングのノウハウ体得は、グローバル人材には必須科目だと言えよう。

今回のフィリピン英語研修後のアンケートでは、「勉強するくらいなら働け」と叱られてしまうフィリピンの貧困層の子供たちに直に接して、「それでも学びたいと思う心を失わない姿勢に感動した」など、ボランティア・アクティビティに対する共感を述べた学生が多く見受けられた。しかしながら、彼らはいまだアジアの現状を知ったのみである。来年度の研修では、ボランティア活動の大切さを知るというステージから、そこに何がしかの積極的アプローチを試みようとするステージにまでに持っていきたい。その行動力についてはじめて、英語力だけでなく人間力を高めて帰国したと言えるのだろう。

本題の英語研修という視点から本年度の研修を見直してみると、総じて期待値を大きく上回る成果を達成できたと言えよう。それでも今回の成功に満足することなく、来年度に向けて、すでに新たな研修計画を練り始めている。

最大の改善点は、今回の1か月研修を2か月研修にグレードアップすることである。フィリピン人講師とのスカイプを利用した日本でのオンライン事前研修を1か月、そしてフィリピンに赴きフィリピン人講師から直接レッスンを受けるオフライン研修を1か月、合わせて2か月の研修に進化させたい。

それは、研修期間を倍にしたこと以上の意味を内包している。オンラインは、オフラインへの予備研修としての機能に加えて、フィリピン人講師のクオリティを肌で感ずることで、ESL講師への不安を取り除いてくれる作用がある。さらに言えば、ほとんどの学生にとって初となる海外体験に対して、心的壁を少し低くしてあげよう。スカイプを通して知り合った講師にフィリピンで会えるとなれば、不安は半減するはずだ。加えて、研修後もオンライン学習の継続を奨励し、支援体制を充実させていく予定である。

マンツーマン・レッスンは、国際総合科学部の事後アンケートでも圧倒的な満足度を示した（4点満点で、平均3.8）。それでも、レッスン数においては平均的であった（一日8コマ中4コマ）。それを次年度は一日8コマ中6コマにまでグレードアップしたい。そうすれば、研修者一人一人にあったスコアアップ対策が可能になり、よりきめ細かい指導体制を敷ける。

国際総合科学部のフィリピン英語研修における来年度の目標は、本年度果たせなかった全員TOEIC 600点以上の取得であり、平均700点台への突入である。IELTSに関しては、平均1.0の伸びを期待したい。なお、英語圏の留学生受け入れ要件がTOEFLからIELTSにシフトしている傾向に鑑み、TOEFLコースは廃止とし、IELTSコースに一本化することにした。

引用資料

1. 高城剛『21世紀の英会話』（マガジンハウス、2013）15.
2. 福屋利信『グローバル・イングリッシュならフィリピンで』（近代文藝社、2015）45.